

第1節 一号円形周溝墓

発掘区の南端にあり円形に全周する溝の中心に主体部を有する周溝墓である。本造構の北東10.4m（主体部から円墳中心部まで）に1号円墳、8m南西には本造構の主体部と主軸方向を同じくする1号土壙墓が隣接する。造構は南西直径7.4m、東西直径8.4mのやや不整な円形周溝が幅70～110cmで全周するものであり、周溝自体は上部を大きく削平されて検出面（赤ホヤ火山灰層）から溝底までの深さは4cm～12cmほどが遺存しているにとどまる。周溝の南南東隅は角ぼっているがこれは最近の土壤である。遺物は、周溝埋土中より土師質の土器片2点が出土したのみで、主体部からの出土もない。周溝中央に掘りこまれた主体部は主軸をN-49°-Wにもつ310cm×85cm×36cm（深さ）の方形状土壙に、東端の両側に主軸に直行する不定な張り出しと、西端部にやや大きな一ヶ所の張り出し部を設ける。同じく西端は幅約20cmで一段高く（墓壇底より20cm）造られている。これは長側板が小口より内側にとりこまれる形の組合せ木棺の可能性が考えられる。

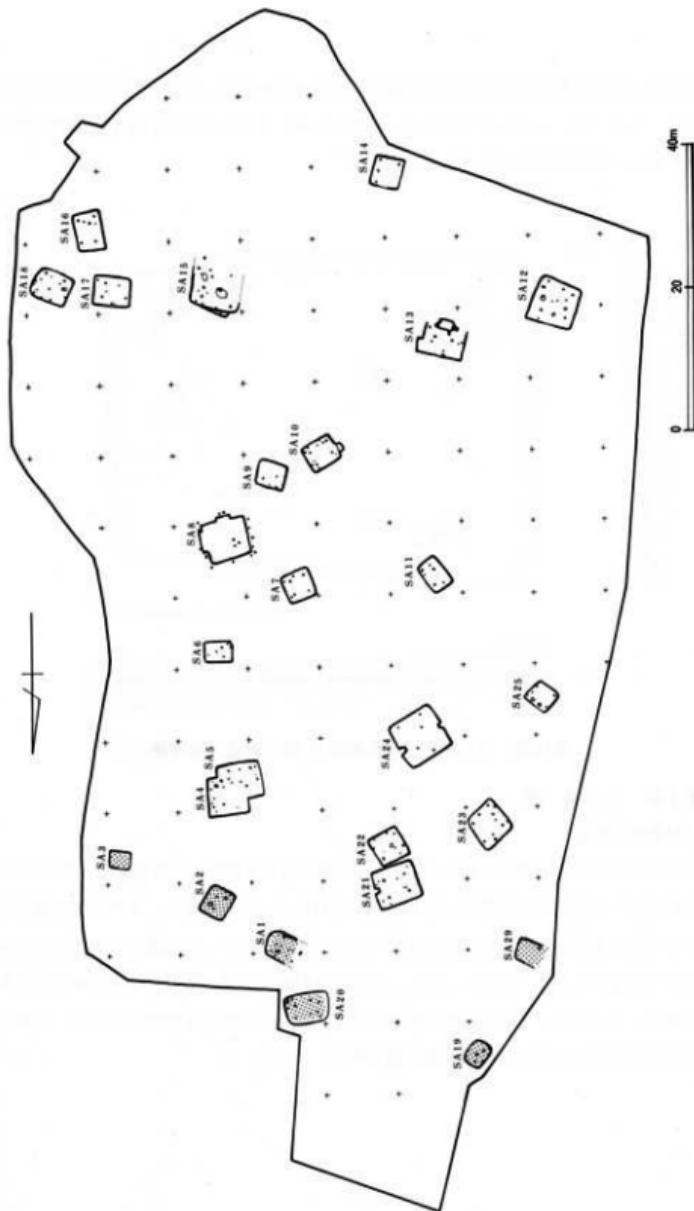
第IV章 銀代ヶ迫遺跡（C区）

本遺跡は七又木地区遺跡のうち、八幡上・七又木遺跡のある主要な丘陵状台地の西端から約10m下位にあるもので、地形上は南へ延びる舌状丘陵となっている。

この丘陵は、北端がくびれ、南端は沖積地へと落ちて約10,000m²の独立した丘陵台地状を呈している。

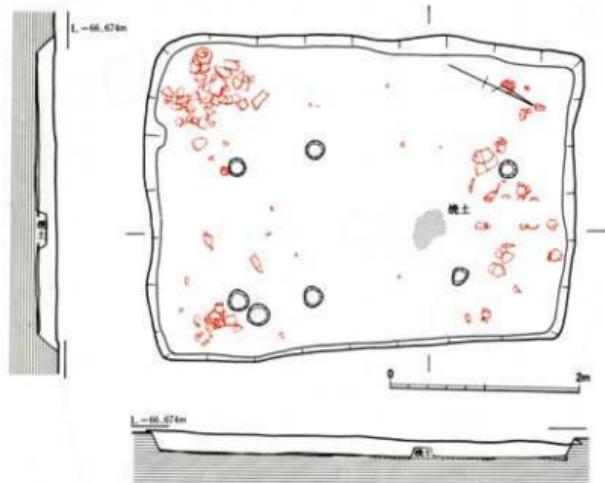
調査地は全面にわたって、耕作による削平がみられ、造構の上部はカットされている。調査によって検出した造構には、縄文早期の集石造構、弥生時代後期中葉の竪穴住居19軒、古墳時代の竪穴住居7軒、土壙2基がある。住居址は丘陵の全面にわたって、とくに密集することもなく散漫に分布している。その中で、古墳時代の7軒の住居址は丘陵の北端（入口部？）寄りに偏って群集する傾向が窺える。弥生時代の住居は、基本的には方形プランを基調とするものが多くを占めているが、住居の一辺に長方形の張り出し区画を設けるもの（S A 8・S A10・S A13）や、住居の中心に向って突き出す突出壁を設けるもの（S A21・S A24）等の特徴をもつものが若干みられる。

各住居址から出土する土器により、時期的には弥生時代後期中葉を中心にそれよりやや新しい段階の時期にあたられ、時期差は少ない。出土した土器のうち變形土器では「く」の字口縁直下に結繩突帯を付ける甕と、結繩突帯の代わりに線刻の斜線を刻する甕が主体となる。



第14図 銀代ヶ迫遺跡遺構分布図

壺形土器では肩部に数条の刻目ない突帯を巡らす單口縁壺で、複合口縁をもつ壺は出土していない。石器では、二孔を穿つ石庖丁、両端二ヶ所にえぐりのある石庖丁、磨製石鎌、磨製石斧、磨石、砥石等の出土が主なものである。

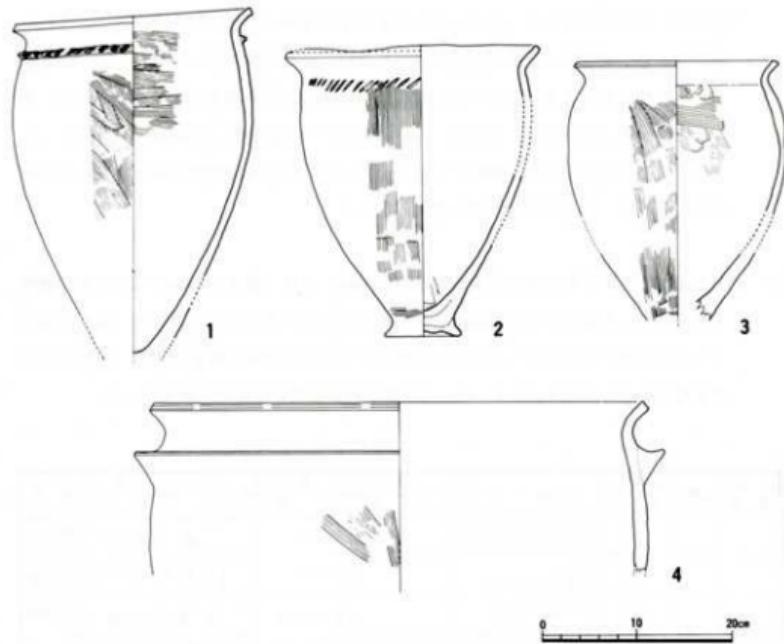


第15図 11号竪穴住居実測図(1/60)(銀代ヶ迫遺跡)

第1節 1. 造構

11号竪穴住居

発掘区中央部付近から西側にあり、最寄りの7号住居から西15mに位置する。長辺4.5m×短辺3.1(3.4)mを測り、南側の短辺が北側のそれに比べてやや長く、やや不整な長方形状を呈する住居である。住居址の上部は耕作による削平が著しく、検出面から床面まで17cm～22cmほどが残存するにすぎない。しかし、遺物は比較的よく遺存していた。床面より7個の柱穴を検出しているが、その不規則な配列から基本となる主柱穴を特定しがたい。中央からやや北寄りに径35cm～40cmの範囲で焼土面を検出している。



第16図 11号竪穴住居(銀代ヶ迫遺跡)出土弥生土器実測図(1/6)

第1節 2. 遺 物

弥生土器

16-1. 器高(底部一部欠)36.7cm、口径24.3cmを測るやや長胴の壺である。突帯上部から強く外反する「く」の字口縁をもつが、屈曲部内側は棱とはならずアールがつく。突帯よりやや下に最大胴部径をもって底部にむけて鋭りぎみにすぼまる。底部は欠落しているが平底を呈するものと推定される。突帯は絡繩状を呈するもので、刻目は施文具に布をあてがったもので斜位(右上がり)に刻まれている。胎土に1.0~5.0mm大の褐、灰、白色の砂粒を多く含んでいる。

16-2. 「く」の字に外反する器高30.7cm、口径（推定）25cmの變形土器で、中央より上部刻目下に最大胴部径をもってゆるやかにすぼまりながら底部に至るバランスのとれた器形である。底部はやや上げ底氣味で外側に張り出して器台状につくられる。口縁直下にヘラ状工具による右上がりの長さ1.5~1.8cmの刺突斜線文が密に施文される。また刺突斜線文は波状に巡っている。器外面はタテハケ目調整。内面はハケ目がまつたぐみとめられず丁寧なナデ調整となっている。内外とも浅黄橙色を呈し、1.0~5.0mm前後の茶褐色、灰色の砂粒が多く含まれている。

16-3. 口縁部が短かく外反する器高（現高）30.8cm、口径（推定）25cmのやや小型の變形土器である。胴部中ごろに胴部最大径をもって丸みのある器形を有する。器外面はタテハケ目調整、内面ヨコハケ目に、胴部上半を中心に指頭圧痕をのこす。内外ともに浅黄橙色を呈して胎土に1.0~4mm大の茶褐色、灰色砂粒を多く含んでいる。

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	形態の特徴	調整		色調		備考	
					外面	内面	焼成	外面		
11	SA3	1	甕	口縁部にタタキ目なし 平底の形態をのこす丸底 丸底部までタタキ	斜方向タタキ	ナデ ヨコナデ	良好	橙 5YR7/6	黄橙 10YR8/6	口縁にかけて厚くスス付着
11	SA3	2	甕	やや尖った丸底 口沿部が長く、ゆるく外反	ヨコハケメ ナメハケメ	ヨコハケメ ナメハケメ	良好	淡黄 2.5Y8/4	浅黄橙 10YR8/3	内に指頭痕
11	SA3	3	甕	口縁部直立 丸底	斜方向タタキ ヨコタタキ	ヨコナデ タテナデ	良好	橙 5YR7/8 黄橙 10YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	縫目痕あり
11	SA3	4	甕	口縁部ゆるく外反 丸底	斜方向タタキ ヨコタタキ 底部近くはタタキなし	ナデ	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	橙 7.5YR7/6	厚くスス付着
11	SA3	5	壺	口縁部直立 丸底	ヨコ、斜方向 タタキ 口縁にはなし	ナデ	良好	浅黄橙 10YR8/3 橙 5YR7/6	浅黄橙 2.5Y8/4	縫目痕あり

表1 八幡上遺跡3号住居出土土器観察表(第11回)

第V章 まとめ

一ヶ瀬川に面した新田原台地の縁辺部に位置する本地区は、その遺跡立地が好適なことによってある程度まとまった遺構の検出は予想されていた。これまでに蓄積された数々の発掘調査の成果によって、すくなくとも台地の縁辺には縄文時代早期にあたる集石遺構を包蔵する範囲が分布していることは容易に想像し得たし、おそらく弥生時代・古墳時代にあたる住居跡等の遺構が検出されるであろうことも近辺の古墳（新田原古墳群）の点在によって明らかであった。また、児湯の台地においては、主に個人の採集に関わるものであるが数々の旧石器も表採されており、先土器時代遺跡の確認も期待されるところであった。
(註3)

ここでは、各遺跡の顕著な特徴・問題点を列挙して今後の課題としたい。

八幡上遺跡の住居跡群は弥生・古墳時代のそれが重複しているにもかかわらず、その占有範囲からしてもきわめて閑散として散漫な分布状況をしめしている。しかし、これは日向の同時期の遺跡を見回した時それが特に特異な事象ではなく、むしろ普遍的で典型的な姿でもある。
(註4)当遺跡においては日向の特徴的な住居である花弁状住居を検出している。いわゆる花弁状住居の本遺跡でのあり方の理解は、同時期・同様な立地条件にある新田原遺跡とは対照的でさえある。住居群のなかでも唯一であり、異彩を放って中心的ともいえる本遺跡に対して、新田原遺跡のそれは遺構のなかでむしろありふれた存在であって特異な印象はない。ただ、本遺跡の花弁状住居については、その形態が七ヶ所の花弁（ベッド状遺構）によって構成され、それが貼床となっていたことを特記できる以外は出土遺物からみても特異性は感じられず、その占める位置と機能についてはなお検討を要する課題を含んでいる。遺物について未整理の段階ではあるが、弥生時代住居の変遷について現時点では、S A13→S A4→S A2→S A6・S A9・S A10・S A11・S A12となり口縁に断面台形突帯（逆L字状）のつくS A13を最古（中期末）として、その他はほとんど時期差のない後期初頭にあてられるものと考えている。

S C 1～S C 5の土壤群は出土した土器により当遺跡よりもむしろ銀代ヶ迫遺跡との関わりをもつものであり、その性格・機能についても類例をあたり、花粉分析の成果も期待したいところである。

銀代ヶ迫遺跡における26軒の住居検出は、とくに弥生時代の住居において一単位の集落を完掘し得たことにひとつの意義を有する。その住居の分布は八幡上遺跡同様に切り合いの少ない散漫な分布状態を示し、時期においてもそのすべてが時期幅の少ない限定された時間の中におさまるようで、上段台地の八幡上遺跡と時期を同じくするものは一軒もなく、あたか

も八幡上遺跡の集団がそっくり移動したかのような状況を示している。

遺物は未整理の段階であり詳細な検討は後にゆずるが、出土した土器群はその形状により
弥生時代後期の中葉にあてられるものと考えられ、日向の編年における不詳期（Ⅵ期）をう
めるべき一括資料となり得る可能性がある。石庵丁・両端打欠石錘・切目石錘・磨製石鎌等
(註7)
の石器類の出土は生業の一端を窺い知るものであり、そのなかでも耕地（畠地）あるいは水
田と居住区との位置関係に興味ひれるところである。当地区の弥生の段階では例えは八幡上
遺跡の時期では下段の銀代ヶ迫遺跡が耕地として、逆に銀代ヶ迫遺跡の時期では八幡上地区
が耕地化されていたのではと、その遺構位置関係から想定することもできる。しかし、これ
は副次的なものであって八幡上遺跡における貝殻を充填した土壤や銀代ヶ迫遺跡における石
錘の検出から一ヶ瀬川（沖積地）との頻繁な往来が実証されており、あるいは主要な生業遺
構（水田）はその沖積地に想定するのが妥当なのかもしれない。

以上、各課題について今後検討を加え本報告に期したい。

註1. 岩永哲夫、菅付和樹「宮崎県内の集石遺構(1)」『九州考古学 第58号』

当遺跡に近隣する集石遺構を主な遺構とする遺跡には瀬戸口遺跡がある。

日高孝治『瀬戸口遺跡』宮崎県兒湯郡新富町文化財調査報告書 第4集 1986.3

註2. 『新田原古墳調査報告』宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第11輯 1940

註3. 茂山謙、大野寅夫「兒湯郡下の旧石器」『宮崎考古3』

註4. 「堂東地遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集』

宮崎県教育委員会 1986

「熊野原遺跡B区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集』

宮崎県教育委員会 1986

註5. 長津宗重「日向型間仕切り住居」研究序説『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書

第2集』宮崎県教育委員会 1985

註6. 「新田原遺跡・瀬戸口遺跡・藏園地下式横穴墓」

新富町文化財調査報告書 第4集 新富町教育委員会 1986

註7. 山中悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案」『研究紀要 No 8』

宮崎県総合博物館 1982

石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描 MK II」『宮崎考古9』1984

図 版

図版 1



八幡上遺跡発掘前現況



発掘後部分景

図版2



八幡上遺跡遺構精査状況



八幡上遺跡遺構検出状況

図版3

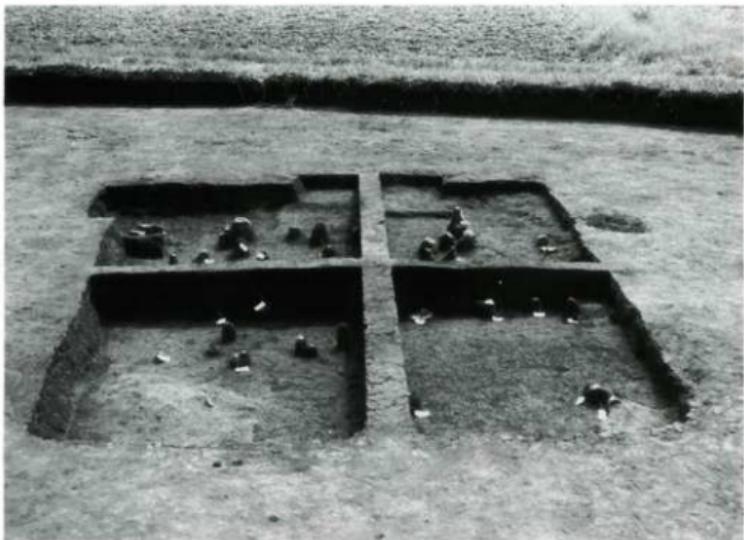


4号住居検出状況



4号住居遺物出土状況

図版4



10号住居遺物出土状況



10号住居全景

図版 5



2号住居精査状況

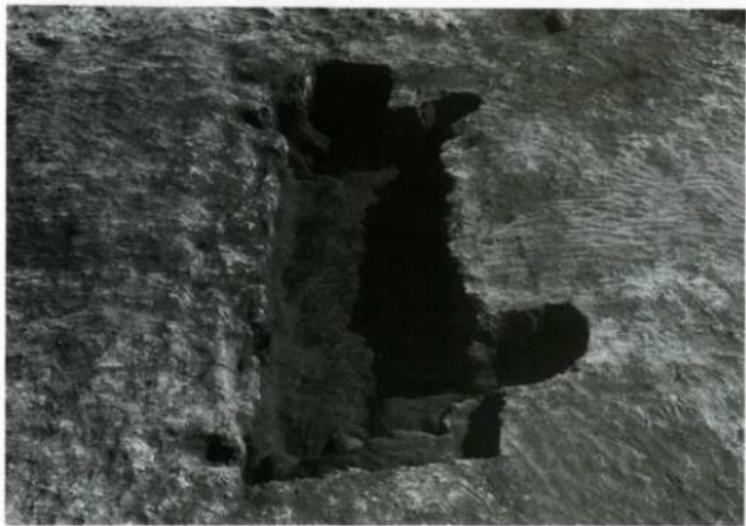


2号住居全景

図版 6



1号円形周溝墓(七又木遺跡)



主 体 部